

平成20年度 お茶の水女子大学経営協議会（第1回）議事録

日 時：平成20年6月23日（月）15：00～17：40

場 所：お茶の水女子大学 大学本館2階 第一会議室（213室）

出席者：（学外委員）足立委員、阿部委員、池田委員、生駒委員、江澤委員、北村委員、關委員

（学内委員）郷学長、和田理事、柴田理事、三浦理事、内田理事、羽入副学長、通山副学長

陪席者：桐村監事、山田監事、塩満学長特別補佐、益田財務室長、最上総合評価室長

1. 開会

2. 学長挨拶

○学長より、【資料2】に基づき、年度当初の挨拶があった。

3. 前回〔平成20年3月10日（月）〕議事録（案）の確認

○修正等がある場合は、平成20年6月30日（月）までに、企画チームまで連絡することとした。

4. 審議事項

（1）平成19年事業年度に係る業務の実績及び中期目標期間（平成16年度～19事業年度）に係る業務の実績に関する報告について

○平成19年事業年度に係る業務の実績及び中期目標期間（平成16年度～19事業年度）に係る業務の実績に関する報告について、総務機構長より、【資料4】に基づき説明があり、審議の結果、原案のとおり承認された。

また、表現上の文言修正が生じた場合には、学長に一任することが了承された。

■ 主な議論は以下のとおり。《☆学外委員からの意見、★大学側からの発言》

☆色々なポイントがあると思うが、ひとつだけ。学部と大学院の連携を図るということを考えているようだが、学部で学士、大学院で修士・博士ということになると思うが、その連携の仕方というのは、どのようなイメージを持っているのか。

★2つの視点があると思うが、横の連携と縦の連携ということで、横の連携というのは、学部の中での連携、ことに、比較的近接の学際領域、たとえば理学部で言えば、数学・

物理・化学・生物・情報だが、もはや縦割りができないような状況になってきている。

一方、学問の進展というのはその中間領域にあり、今、大いに進展してきている。これをどうするかということに関しては、従来、ほとんど対応が取られていなかった。この学部内連携については、半年ほど議論し、ある方向性というのを出してきた。

その、いわば近接学際領域とでも言うべき部分に関しては、中間領域を設定していくことを考え、すでに文教育学部では、「グローバル文化学環」という、学科ではない教育組織が走っている。これは学部内学科横断的なもので、30名ほどの進学希望者が、ここ数年出ている。学科と同等の働きをするが、学科ではない、よって定員を持たない。

各学科にもととの根はあるのだが、その学生たちが、グローバル文化学環という国際的な活躍を志向する分野に入っていくような自由構造にしている。それを他の学部でも当然広げていくということが一つ、それから、今度は学部と学部の間を連携させるような隣接的な学際領域というのも、まだ動けない状態だが、こういったシステムにした方がいいのではないかという案も、すでに出てきており、現在検討中である。

具体的にどうするかと言うと、卒業研究で、たとえば理学部の化学科にいる学生が、生活科学部の生活工学というところで、住居の研究をしたいということがあれば、その勉強が受け入れ可能なレベルになった時に、生活科学部の教員の所で卒業研究ができるといったことを考えている。

また、学部から大学院に進む際にも、今までだと、物理なら物理の試験を受けないと大学院には行けないので、自分は化学や生物に進みたいと思っても、実質的には行けない。今、大学院で考えているのは、物理の出身者がまず物理で試験は受けるが、生物のコースの教員が受け入れると言え、そちらに行けるようになるという形のものである。

物理だ生物だと言ってはられない領域、たとえば生命情報学が典型なのだが、生命と情報と物理が絡んだような分野とか、そういうものに柔軟に対応できるようにという形で、今年度中には制度設計を終え、なるべく早い段階に具体的に動き出せるようにしていきたいと考えている。

☆リベラルアーツの上に立つ学部の専門教育ということだが、さらにもう一步踏み込んで、入学の段階から学部の垣根を取って、とりあえず2年間はリベラルアーツを学んで、その後に、将来の選択をするといったことを現在考えている、あるいは、今後考えられるような余地はあるのか。

★繰り返しになるが、学部・学科の垣根を超えることが、ひいては大学院に新しい形で入っていくことができるようになるというところがみそになる。

特別教育研究経費の平成21年度要求として、「文理融合リベラルアーツから学士課程の再編へ」というものがあり、これは、まさに今、委員からご質問いただいた、今年度から事業が始まったリベラルアーツの考え方を、学士課程の専門教育、それから大学院

に向けて広げていくとどうなるのかということを考えているものであり、全学教育システム改革推進本部において、今年度のテーマとして、学士課程を今後どのように編成していくのかということ、学長のほうから、この時期に、次の中期計画をにらんで議論するよというご指示があり、議論を始めた段階である。

ここでは、一つの考え方として、今は3つの学部の中に学科や講座やコースなど、いわゆる専門課程があるわけだが、入学段階では非常に大ざっぱに、人文・社会・理学というような3つぐらいの試験群に分けて、そこから進んでいくというやり方を取っていくとすると、このリベラルアーツで養った考え方が、専攻に入っても横に広げていくことができるのではないかと。そしてこのことが、学士課程で出て行く場合の、いわゆる社会人基礎力にもなるし、あるいは、専攻に進む際に、縦割りでない横の広がりを持った大学院生を育成する土壌になっていくのではないかとといったことを、ちょうど議論し始めているところである。

AO入試は、全学枠ということで、つまり全学で一つの枠で募集し、その中で模擬授業を聞かせ、レポートを書かせ、討論させて、それらを採点して決めるという方法を採用した。それが一つ、新しいタイプの試験、非常に大きな枠でやった試験で、結果は、10名の募集に対して99名が応募し、試験そのものが面白かったという評価を、受験生からもらっており、つい最近、旺文社の蛍雪時代にも取材をいただいた。

AO入試については、かえって学力の保障がないという批判も、去年の秋ぐらいから出てきているわけだが、学力の点では、ほとんど母集団は問題がなく、非常に良い成績だった。後の追跡調査で、1月のセンター試験の結果を見たところ、非常に高い成績だった。その学力にプラスアルファで、議論をし、理解し、そしてその問題をまとめていくという力を持った学生たちが入ってきているという、良い結果が出ていると考えている。蛍雪時代の中では、これが本当のAOというものだ、というようなご紹介をいただいた。

☆学科を廃止するという方向で検討しているのか。学科がなくなるというのは、ものすごく大きな改革だが、それを考えているのか。

★その点については、これからである。今、本学の文教育学部で実際にやっていることは、学科はあるのだが、1年間はフリーであり、2年目に、その学科の下にあるコースというものを選ぶというものであり、理系をどうしていくかについては、今後検討していく。

痛し痒しのところがあって、本学を一番特徴付けているのは、おそらく生活科学部である。食物栄養学科とか、昔で言えば児童関係、今で言えば発達臨床関係といった、大変特徴的な学科があり、いわば本学は、そういう分野における人材の輩出元になっている。全学的に学科を一律で潰してしまうと、この生活科学部を潰してしまうという、あ

る種の、今まで本学の特徴だった部分を潰してしまう可能性もある。なので、その辺はプラスマイナスを十分に考えた上でということで、今のところは少し歯切れが悪いということをご理解いただきたい。

☆18歳や19歳ぐらいで自分の一生を、専攻する道を決めるというのは、少し酷かなという感じもしないでもないのだが、最初の2年間の勉強の中でいろいろと考えて、自分の進むべき道を選択するというのは、学生たちにとってはむしろその方が親切なのではないか。ただ、問題はいくつかあるだろうが。

★私も、今のご発言の内容は良く分かるのだが、一方で、女性は割と現実的でもある。この資格を取りたいと言って本学を受験してくる人たちは、やはりかなりいる。その典型が、管理栄養士である。成績も非常に良い人たちが、そういうところを最初から狙って来るので、そのような方たちにとっては、最初から勉強したい、一直線にそれを目指してやりたいという希望がかなり多いというところもある。

そのような要望を満たしながら、一方では、文系も理系も両方やってみたら結構面白いというような人が出てくるといった要素もあり、そこをどうやってうまく両立させていくかというところが、実は私どもにとって一番の、これからの大きな課題ではないかと考えている。

☆秋田に国際教養大学という大学があるが、京大や東大の文Ⅲよりも偏差値が高くなったそうで、教養学部だけの大学だが、自分の専門を決められない学生が増えているということである。おそらく、学生の半分以上は女性だったと思うが、これは、わたしが思っていたことと全く違った現象が起きている。

★最近分かったことは、先生方はやはりどうしても、学生にはアカデミックな世界で活躍して欲しいと考えてしまう。これはどこの大学でも同じだと思うのだが、やはりエゴが出てしまう。ところが学生は、実際には産業界にほとんどが就職するわけであり、そのミスマッチというのはすごく大きい。なので、教育のあり方、特に女性の場合というのは、ちょっと違うかも分からない。男性と女性とでは違うところもあるかと思うが、元気のいい人たちが、産業界に行って活躍したいという希望をかなり持っているということも分かった。

今まで本学は、あまりそういうことを熱心にやってこなかった感じもする。先生方自身は、ずっとアカデミズムな世界にいたので、やはりどうしても、アカデミズムの方に傾きがちであったな、ということ、今見直しているところである。

いろいろとお知恵をお借りしながら、本学としてどういうやり方が良いのか、本当にリベラルアーツだけでやっていくことが良いのか、このあたりも考えていきたいと思っ

ている。

☆この評価の資料はとても膨大であり、要求しすぎだと思っているのだが、これを全部作るにあたって、どのくらい的人数と時間が掛かったのか。それは先生の労働の何パーセントになるのか。

★教員としては、各部局において、数名の先生が付きっきりになり、昨年10月ぐらいから今年の6月半ばまで、かなりの時間を費やされたと思う。正確には申し上げられないが、人によっては、ほとんど土日を潰して作業した。研究のモチベーションを上げるためには、ある程度の時間が必要だと思うのだが、そのモチベーションを上げるための時間を、こちらの作業に割いたというようなことを少し聞いたことがある。私個人のことで言わせていただければ、ここ2カ月ほどは、毎日、夕方5時から夜9時ぐらいまでは、この作業をしていたような記憶がある。

☆教員の何割ぐらいが、この作業をしたのか。

★基本的には、作業をなさった先生は全体の20パーセント程度であろうと思うが、多くの先生方は、データをお出しいただくのに、かなりのご努力をなさったと思っている。

★私もこれは、どれだけという数値のデータを出さないといけないと思っていたところである。相当と言ったのでは、たぶん通じないと思っている。

★委員がおっしゃった通り、これは大変な問題だと考えている。というのは、お茶大のみならず、国立大学に対して同じようなことを要求しているのだと思うのだが、一方、予算については、毎年減らすこととなっている。この評価の作業をする中で、一番大きな問題としては人件費の問題があり、諸経費の問題もある。これほど分厚いものを、今、国立大学に対して要求するということは、少し理解しがたい。もう少し考えた要求の仕方を、大学に対してしてもらわないと困ると考えている。

☆これは次の会合で学長から説明をしてもらえばありがたいのだが、3ページに、戦略的人事という問題があった。これは、国立大学にとって見れば、私学の状況を勘案すると、大変恵まれた環境の中でこの人事が行われているということで、おそらく、大変素晴らしい人事の採用がこれから継続的に行われていくのではないかと感じているが、そういうことをトータルして、先ほど学長からお話のあった、産業界への女性の進出ということも絡めて、トータルな考え方を展開すると、今後5年から10年先、教育のグローバル化の進展ということを考えていけば、お茶大の個性豊かな大学力という

ものを、今後どのような方法で築き上げていくのか。たとえば学生の問題、教育力の問題、教員力の問題、そして教授会、役員会というものを、どのように噛み合わせて、お茶大の特色ある大学力というものを築き上げていくのかということについて、方向付けというか、方角というか、その点について、構築の仕方を、次の会合でお話いただければありがたいなと思っている。

★大変いいタイミングでご質問を頂いた。つまり、次期中期目標期間の計画を立てなくてはならないので、おっしゃられたことは、まさに今、私どもが集中して、今年度考えるべき時であるので、お許しを頂ければ、次の10月までには、詰めてきちんとお答えができるようにさせていただきたい。

(2) 平成19年度決算について

○平成19年度決算について、総務機構長より、【資料5】および【資料6】に基づき説明があり、審議の結果、原案のとおり承認された。

■ 主な議論は以下のとおり。《☆学外委員からの意見、★大学側からの発言》

☆純利益を使い切らないと、次の交付金が削減されてしまうということはあるのか。

★今、学長が集まると常にそのことを文科省に尋ねている。次期に持ち込むことは、これはおそらく、かなり難しいということであるので、最後の平成21年度には、建物を作るなど、全て有効に使うことを考えている。

☆キャッシュフローのところ、期首が18億で期末が33億、年間で15億増えているというのはなぜか。

★19年度においては、主に、施設工事関係の未払い金があり、この大きな支払いが、20年度4月に持ち越されたということがあり、これが33億円の大部分を占めている。

☆オーバーオールで知りたいのは、国の競争的資金も入れて、国からいくらで、産業界からいくらで、学生さんからいくらだったかという、そういう数値は分かるか。

★現在手元にはないので、分析次第、ご提示したい。

(3) 平成21年度概算要求について

○平成21年度概算要求について、総務機構長より、【資料7】および【資料8】に基づき説明があり、審議の結果、原案のとおり承認された。

■ 主な議論は以下のとおり。《☆学外委員からの意見、★大学側からの発言》

☆予算要求ということに端的に表れてくると思うので、この予算だけではなく基本的なこととも絡めて伺いたいのだが、先ほどのお話で、研究者育成をと考えていたら、実際には、産業界に進もうとする学生が多いというお話があった。思うのだが、たとえば学生のニーズ、リクエストに際限なく答えていくのか、あるいは、大学のたたくまいみたいなものを、ある一定程度定めていくのか、そのことは、結果的に予算にすごく表れてくると思う。

どういう調査をして、実は産業界に行こうと思っている学生が多いということが分かったのか。それから、それが分かったことで、こういった予算要求に、何か反映される部分があるのかどうか、その辺を教えていただきたい。

★一つは、学生へのアンケートというのをやっており、それが示すところが、やはり産業界に行く、総合職に就きたいというような、新入生に聞くとそのような回答がかなりあるということである。

それから、お茶大は今まで、研究者や教員を育てるということには実績があるし、やはり先生方も非常に熱心であるので、どうしてもアカデミックな方に傾いてしまう傾向にある。産業界の場合は、就職のときに先生が特に世話をしなくても、皆自ら就職していく、勝手に就職していったという、ある意味ではすごく楽な思いをしている。それでも、99.6パーセントとか、非常に就職率が高かった。つい先週なのだが、産業界で活躍している女性、理系の方たちだが、その方たちを集めた女性科学技術者の会があり、パネルディスカッションをやった。すると、学生がたくさん来てくださった。いつもなかなか、シンポジウムをやっても、私が話をしても来ない。どうして来ないのかというのは、私もすごく不思議だったのだが、今回質問をし、うちの学生に聞いたところ、「こういうパネルディスカッションは、うちの大学ではめったに聞けない。だから今日は、こういうのを聞いてすごく良かった」と。「産業界で女性の人たちがどうやって頑張っているのかがよく分かった」という発言があったりして、そこで初めて、今まで私たちは、このような面の指導に気付いてなかったんじゃないかということ、非常に強く、個人として感じた。

競争的資金で、現在申請中のものがあり、これは学部教育なのだが、産業界でリーダーとなる人たちをどうやって養成するかというプログラムに申請した。具体的にはそういうことがある。

★今、数値そのものは持っていないが、就職のことは毎年調査をやっており、大ざっぱに

言うと、文系の人間は3割弱が進学で、理系の場合は5割強が進学なのだが、残りは就職希望となっている。この就職希望者の中には、産業界と教員と公務員とを含んでいる。昨年秋に、在學生、それから卒業生、大学院生、修了生の大規模な調査をした。10年後の自分の将来像ということを知ったときに、企業の総合職、企業の専門職を希望するという回答がかなり高い比率で出ており、約20パーセントから30パーセントぐらいだった。このようなことを踏まえ、学生支援GPという事業に、4月に応募した。これは、「出る杭を育てる」というネーミングで、今まではむしろ、出る杭は押さえられてきたが、そのような人間を私達は育てていきたいというものであり、今申し上げたような学生の動向を踏まえ、これまでは、割と自然に就職が決まっていたので、それほど特色のあることをやっていたが、これからは力を入れて、大きく変えていくということ、学長のほうでお考えになられている。

今お示ししている予算要求では、たとえば女性リーダー育成プログラムであるとか、国際人材育成という特別教育研究経費の中に埋め込まれており、語学教育の強化であるとか、留学支援の要素が入っている。単体としては、今お話しした「出る杭を育てる」というプログラムが通ってくると、そういうことがかなりはっきり出てくると考えている。

★このプログラムでは、産業界の方々とも協力してやることも考えており、この経営協議会にも、女性の活躍を大変応援していらっしゃる企業のトップの方がいらっしゃいますので、もし通れば、ぜひ、いろいろプログラムをご一緒にさせていただきたいと考えている。

☆関連することだが、経費の中で、割合そういうのを重点的に考えているというのはよく分かるのだが、先ほどの教育システムで、たとえばリベラルアーツというのは、やはりどちらかと言えばゼネラルな教育なので、女性リーダーを作るという意味では、むしろスペシャリストじゃなくて、そのような全体的に幅の広い、しっかりと考えて行動できる女性を育成するということが、もっとリベラルアーツを全体に広げるということはすごく大事だと思うが、スペシャルな、例えば「資格」を出すといったような細かいところとの関係が、結構難しいかなと感じつつ拝聴していた。もともとお茶大はそういう資格を出す所ではなかったのだろうが、今はやはりそういうニーズがあって、いい学生が来るということだと思うのだが、その辺で何を大事にしていくかということが、やはり今後の課題かなと感じた。これから前進していくというときに、一体何を求めていくのかということ、リベラルアーツなどの色々なプログラムと関連させて、きちんと方向を定めていただくと良いのではないかなという感想を持った。

5. 報告事項

(1) 国立大学法人をめぐる状況について

○国立大学法人をめぐる状況について、学長より、【資料9】に基づき報告があった。

(2) 「学士課程教育の構築に向けて(審議のまとめ)」について

○「学士課程教育の構築に向けて(審議のまとめ)」について、学長より、【資料10】に基づき報告があった。

(3) 「戦略的大学連携支援事業」について

○「戦略的大学連携支援事業」について、学長より、【資料11】に基づき報告があった。

■ 主な議論は以下のとおり。《☆学外委員からの意見、★大学側からの発言》

☆戦略的大学連携支援というのは、女子学生に限るのか。

★そういうわけではない。私どもは女子大学だが、現在でも協定大学との単位互換制度を採っている。単位互換は男子学生が来ても構わない。これは、その延長としての取組みというように考えているので、男子学生が本学の講義を聞きに来る、あるいは、先生と一緒に研究をするということがあっても、それは今までの拡張だと考えているので、女子大学ということはもちろん変えずに、このままやっっていこうと考えている。

☆質問と言うより、これはお願いなのだが、学費について、もう少し資本投入すべきだという考えはその通りだと思うのだが、それをアピールする際には、子供を持たない夫婦、なぜ子供を持たないかという、将来、高等教育を受けさせる自信がないから、教育費が高すぎるからということで、それも少子化の要因になっているわけである。今、行政に、「少子化だから」というと非常に錦の御旗的に効くところがあるので、少子化を阻止する意味でも、カップルが子供を持ちやすくする意味でも、教育費というのは非常にサポートが必要だと思うので、ぜひ、学長のアピールにそれを加えていただきたいと思う。

★それは大変重要なことで、教育は、受けた人だけではなく、国全体に大きく返ってくるものなので、個々の人が自分で全部投資をすれば良いのではない、ということが、今まさに、少子化の時代にあっては大きな問題だということ。それがあまり謳われていないので、よく注意し、これからはそういうことを言っていきたいと思う。

(4) 附属小学校給食施設・設備の改修について

○附属小学校給食施設・設備の改修について、教育機構長より、【資料 12】に基づき報告があった。

■ 主な議論は以下のとおり。《☆学外委員からの意見、★大学側からの発言》

☆この小学校の給食室の話は、対外的なイメージの上で非常に重要なことだと思うので、スピーディーに、しかも自主財源で措置されたというのは、大変結構だと思う。やる以上は、きちんとした設備にすべきことは当然だと思うが、コストの面でどうなのかということがあると思うので、その辺はよくチェックをして、有効な新設備ができればいいと思っている。

★教員に配分する研究費を全部こちらに充てるということもあり、大変我慢していただくということになる。しかしながら、今より良い給食になって、「ああ、さすがお茶大の給食だ」と言っていただけに、皆で頑張っていく。

☆今回の問題と、それからその後のリニューアルについて、保護者の方々の意見というのは、何か目立つようなものはあったのか。

★5月の保護者会において、来年度の早い時期に再開するということをご説明した。もともと、給食を中止した昨年12月17日の時点や、本年1月の保護者会においても経緯をお話していたが、5月に改修計画についてアナウンスをした。その時点では、まだ予算の措置等が正式に、経営協議会、役員会の了承をいただいていたので、先日、持ち回りにて委員にご説明をさせていただき、ご承認をいただいているので、7月の保護者会において、このようなスケジュールで考えているということをご説明申し上げることにしている。

もう一つは、保護者の方からのご意見やご不満をいただける形で、Eメールアドレスを、小学校とは別に、附属学校部にも設置し、そちらのほうで意見をいただくような形も取っており、すでに5～6件の具体的な意見をいただいている。このように、個別にも意見がいただけるような方法で進めている。

☆今回何を調査するのか。

★小学校と大学の間での意思疎通がどうなっていたかというようなことは、きちんと調べないと分からない。小学校の給食調理に関係する人たちだけではなく、時間を遡って、小学校の校長や教頭を務めた方々とか、あるいは施設関係の担当の人とか、そのような

方々も含めて、書面調査と同時に、実際に人を呼んで、過去のいきさつをきちんと調べなくてはならないと考えている。

☆こういう問題は、本来文科省が緊急に対処すべき問題なのに、なぜ自主財源でやるのかということ、先日尋ねた。そして過去の話をして少し伺ったところ、いささか納得いかない説明を受けた。

★文科省とは、公式には3回折衝した。それから、緊急に呼び出されたというのが1回あり、それは文科省のあるセクションからだったのだが、全体として4回行った。改修費用が1億円を超えるという試算が出た段階で、自主財源でやるというのはきついということで、概算要求のお願いをした。自己財源でやるとすると、たとえば、教員研究費も削らなければならないし、施設整備も止めなくていけない。備品、実験設備などを買えなくなるとか、いろいろなことが起こると思ったので、概算要求に加えたいと思ったのだが、交渉の過程で、具体的に何年何月から改修ができるという保証はできないということをおっしゃられたこともあって、学長や他の役員の方々と検討した結果、本学としては、自主財源でやるという方向になった。やはり本学がいけないので、とにかく、このような形にした。

★正確な事実の把握については、これから調査していく。

★予備調査のような形で、附属学校部が中心となって調査はしていたが、事実を正確に押さえておくには足りない。ただ、調査結果が出るまで全て止めておくわけにいかない、緊急性が非常に高いという判断を学長もして下さったので、このような形で、自主財源をもって早急に整備するというようにした。

☆責任の所在もいろいろとあるかとは思いますが、前向きに捉えていただき、いくら調査に時間を掛けてもいい結果が出るようなものでもないもので、ぜひともスピーディーに進めていただきたい。

(5) 競争的資金等の受入状況について

○競争的資金等の受入状況について、国際・研究機構長より、【資料13】に基づき報告があった。

(6) ユビキタスコンピューティング住宅の建設について

○ユビキタスコンピューティング住宅の建設について、総務機構長より、【資料14】に基づき報告があった。

(7) センターの改組について

○センターの改組について、学長より、【資料 15】に基づき報告があった。

(8) 学長の行う戦略人事について

○学長の行う戦略人事について、学長より、【資料 16】に基づき報告があった。

(9) *Annual Report 2007* (暫定版)

○*Annual Report 2007* (暫定版) について、学術・情報機構長より、【資料 17】に基づき報告があった。

(10) 資金運用に関する勉強会(第1回・20. 6. 17 開催)について

○資金運用に関する勉強会(第1回・20. 6. 17 開催)について、学長より、【資料 18】に基づき報告があった。

6. 自由討議

■ 主な議論は以下のとおり。《☆学外委員からの意見、★大学側からの発言》

☆資金運用の話で、その余裕資金というのは、だいたいどのぐらいを考えてらいるのか。

★私どものほうで、昨年12月、その関連のシミュレーションを若干したところ、資金運用に充てることのできる余裕金の範囲というのは、最大で4億円程度と考えている。

7. 閉会

○次回開催は、平成20年10月29日(水)15時からであることを確認した。

以 上